

Abstract

国連の平和維持活動の諸改革の再考

中谷 純江（一橋大学 講師）

本稿では持続的な平和を再考する前提として、まず国連の平和と安全の取り組みに関する現状を指摘する。それは安保理の亀裂もさることながら、内部再編を繰り返すのみで抜本的な改革も構想の転換も生み出せない事務局の空洞化を示唆している。その一方で紛争の構造は多極化・局地化し、戦闘地域も国境や山岳地帯を中心とした従来の反乱図式から都市部での攻防へと推移している。また反乱鎮圧や対テロ軍事行動の最前線を民兵組織などが担う潮流も、安全保障体制の再定義へと繋がっている。本稿ではこの安全保障のハイブリッド化を犯罪学や都市学の文献なども参考に考慮し、主権が分割されている状態での国連平和活動の限界を指摘する。多様な紛争当事者が競合する中、これまでの政府と反政府組織との政治的合意を軸とした和平プロセスでは暴力が収束しない。持続的な平和の実現性だけでなく、その定義そのものが問われている。